

Title	第9回 プラトン・シンポジウム 市民公開講座：プラトン哲学の現代的意義： 『ポリテイア』（国家篇）を中心に（8月7日 三田キャンパス西校舎ホール）
Sub Title	The 9th symposium Platonium of the international Plato society : The significance of Plato's philosophy in the contemporary world: reconsidering the Politeia
Author	鈴木, 康則(Suzuki, Yasunori)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2010
Jtitle	Newsletter Vol.13, (2010. 9) ,p.2- 2
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000013-0020

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

第9回 プラトン・シンポジウム 市民公開講座 プラトン哲学の現代的意義～『ポリテイア』（国家篇）を中心に～

The 9th Symposium Platonium of the International Plato Society The Significance of Plato's Philosophy in the Contemporary World: Reconsidering the Politeia

(8月7日 三田キャンパス西校舎ホール)

2010年8月7日、プラトンの『ポリテイア』を主題とする市民公開講座が開催された。日本西洋古典学会と日本学術会議が主催し、当拠点が共催したものである。この公開講座は、慶應義塾大学で開催されていたIPS (International Plato Society) による学会最終日の行事でもあり、学者・研究者に加え、市民も多く聴講する盛況を見せた。

第一部は加藤信朗首都大学東京名誉教授による基調報告から始まり、そこでは『ポリテイア』という題がどのように訳されてきたかが概観され、現代におけるその問題が提起された。続いて、当拠点論理・情報班の納富信留教授による講演「『ポリテイア』の現代的意義」においては、『ポリテイア』研究が21世紀において、これまでとは一線を画す段階に入ったことが強調された。S. R. Slingsによるギリシア語テキストの新校訂版、Mario Vegettiによる注釈、G. R. F. Ferrari 編集による研究書、Melissa Lane や佐々木毅氏による受容史研究など、世界の様々な国において重要な成果が生み出されていることが述べられた。

第一部最後の報告は、国際プラトン学会元会長 Livio Rosetti 教授による「プラトンの『国家』は論文ではない」という講演であった。氏によれば、プラトンの『国家』は、既にアリストテレスの読解がそうであったように、多くの時代においてあたかもそれが「論文」であるかのように扱われてきた。しかし『国家』という複雑な構造をもつ対話篇を、1つの主張を持った「論文」のように扱うことは、多くの重要な点を取り逃がすことになる。ファースト・フードの流儀のように『国家』を扱うのではなく、スロー・フードの流儀に従うかのように、じっくりと『国家』という「対話篇」が持つ含蓄を味わうべきであることが強調された。

第二部は岩田靖夫東北大学名誉教授による「アリストテレス政治思想の現代的意義——プラトン『国家』の思想との対比において」と題された講演から始まった。氏はプラトンの政治思想とアリストテレスのそれを対比し、いくつかの問題提起を行った。たとえばプラトンの言う「哲人王」による政治は、王以外の全ての人間（労働者等）から自律性を剥奪していることが指摘された。プラトンによる政治体制と比較されたうえで、アリストテレスの政治論において重要視されるべきは「多くの人々の合意 (endoxa)」であり、この点こそ現代において受け継ぐべき「遺産」であることが示された。

続いて国際プラトン学会副会長の Luc Brisson 教授による講演「プラトン『ポリテイア』における女性」が行われた。氏によれば、国を守る「戦士」のグループに女性を割り当てることは、当時のアテナイ市民たちにとっては馬鹿げたことであったが、プラトンにとって、男女の違いは仕事の割り当てには影響しないものであった。さらにプラトンは、国家を導く役割としての哲学者のグループにも女性の存在を

認めていたと思われ、「魂」を重要視するがゆえに女性と男性を同じ水準に置く点において、現代的とも言える議論を提起していたのである。アリストテレスやフェミニストたちによる痛烈な批判も考慮の必要があるが、プラトンによる先鋭的な水準の議論を忘れるべきでないことが示された。

第二部最後の報告は、佐々木毅学習院大学教授による講演「20世紀政治の中のプラトンと『ポリテイア』」であった。氏は20世紀において、プラトンがどのように政治の文脈で利用されてきたかを示した。19世紀以前、『ポリテイア』は現実の政治にかんする含意を持つとは思われなかったが、ニーチェやヴィラモヴィッツの解釈を経て、そして第一次世界大戦を契機として、プラトンによる共同体論が注目を集めることとなった。やがてゲオルゲ派の解釈を経て、プラトンはナチスの人種論の根拠としても読まれることになったのである。こうした読解は、後のポパーによるプラトン批判へと繋がってゆくように思われるが、ファイトやクロスマンによる複雑なプラトン評価も見逃されるべきではない。自由な金融市場の崩壊が、政府による積極的な介入への道を準備しているように思われる現在、われわれの世界もなお「プラトンの呪縛」の圏内から逃れていないのではないかと、という点が指摘された。

第三部は、出席した研究者・一般参加者による質問に対して講演者が答えるというかたちで全体討論が行われた。「『ポリテイア』をどこから読み始めるべきか」、「哲学者や大学教授は良い政治家になれる可能性はあるか」等々の質問があり、研究者・一般参加者と講演者との間で活発なやり取りがなされた。第一部から第三部まで、三嶋輝夫青山学院大学教授による司会のもとでシンポジウムは円滑に行われ、市民と研究者達による興味深い討論を多くの人が共有できたと思われる。

(鈴木康則)

The 9th Symposium Platonium of the International Plato Society, “The Significance of Plato's Philosophy in the Contemporary World: Reconsidering the Politeia” was held on 7th August, 2010, at Keio University. Six lectures were delivered by Shinro Kato, Noburu Notomi, Livio Rossetti, Yasuo Iwata, Luc Brisson, and Takeshi Sasaki. They discussed the importance of the book *Politeia*, and presented stimulating and enlightening interpretations, for both experts and the public. At the end of the symposium, a general discussion was held between the speakers and the audience. Thanks to the lectures and an excellent chairmanship of Teruo Mishima, we had a great opportunity to further explore the world of Plato.

